

知られざる建仁寺・・・えびす信仰の秘密

1、はじめに

建仁寺は、清水寺と同じように「鳥辺野」にある。もともと建仁寺が栄西によって創建されるまでは葬送の地であり、死者が埋葬されたていた。埋葬されずに死骸がゴロゴロしていたかもしれない。

「鳥辺野」というのは、古代の京都盆地随一の葬送の地であるが、その中心が「六道の辻」であった。「六道の辻」の辺りは現在は轆轤町というが、古くは「髑髏町」と言ったそうである。大谷本廟から清水寺にかけての尾根筋が「鳥辺山」である。比叡山から東山に続く主尾根にある阿弥陀峰から発して、清水寺を経て大谷本廟に続く枝尾根が「鳥辺山」である。そして、その北側、すなわち阿弥陀峰から発する谷が「鳥辺野」である。

伏見稲荷の場合は伏見山から発する谷筋に埋葬地の中心「御膳谷(ごぜんだに)」があり、「六道の辻」の場合は阿弥陀峰から発する谷筋に埋葬地の中心にそれがあったという訳である。この谷筋の頭の部分には清水寺があるし、裾野には建仁寺がある。清水寺は全国有数の「聖地」であると同時に全国有数の「魔界」でもある。「聖地」必ずしも「魔界」と限らないが、「魔界」は必ず「聖地」でもある。すでに述べたように、「六道の辻」のアースダイバー地図を念頭にいうならば、「六道の辻」からつづく松原通は、三年坂を経て清水寺の谷筋に至るが、ここも「六道の辻」と同様に縄文時代からの死者の埋葬地であったのであり、まずその地理をしっかりと認識してもらいたい。

http://www.mapion.co.jp/m/basic/34.991062279636516_135.78629017990048_9/t=simple/icon=home,139.76050277,35.69250555

したがって、「六道の辻」という時、一般的には、珍皇寺を中心とした比較的狭い範囲というが、私は、広義に解釈して、清水寺や建仁寺を含めた比較的広い範囲をいうべきだと考えている。珍皇寺は建仁寺の境内にあり、建仁寺の塔頭の一つである。次の地図を見てもらいたい。八坂通を隔てて珍皇寺の北隣に霊源院という建仁寺の有名な塔頭がある。一休が幼い頃ここで学んだという。

http://www.mapion.co.jp/m/basic/34.99593697123696_135.7782212261284_9/t=simple/size=600x550/icon=home,135.7782212261284,34.99593697123696/

昨年の特刊公開に関するホームページに、霊源院が建仁寺の塔頭であると紹介してあるが、そのことは建仁寺の境内地図を見ればはっきりする。

<http://www.kenninji.jp/grounds/index.html>

なお、この建仁寺境内地図に「えびす神社」が掲載されていることにご注目願いたい。その「えびす神社」の公式ホームページによると、次のように由緒が説明されている。すなわち、

『 京都えびす神社は西宮・大阪今宮神社と並んで日本三大えびすと称され、「えべっさん」の名で親しまれています。その起源は約800年前土御門天皇の建仁2年（1202年）に禅の祖といわれる栄西禅師が建仁寺建立にあたり、その鎮守として最初に建てられたものです。』・・・と。

建仁寺の境内地図に掲載されている「えびす神社」は建仁寺の鎮守社であるというのだ。「えびす神社」が建仁寺の鎮守社であるというのは尋常なことではない。よほどの事情があったに違いない。以下にそのことをいろいろと考えていきたいと思う。私の「えびすホアカリ考」のはじまりはじまり！

2、恵比寿神社宮司の話

恵比寿神社の宮司は「京都の恵比寿神社は 祇園・大和大路を南へ下がった建仁寺の西隣にあります。この場所がかつては建仁寺の境内であり、建仁2年（1202）、建仁寺の鎮守社として栄西禅師が建立したのが始まりです。栄西禅師が宋へ渡るとき嵐に遭ったのをえびす神に救われたことから、帰朝後お祀りしたと伝わっています。」と語っているが、実は、この宮司の説明と恵比寿神社の公式ホームページに掲載されている恵比寿神社の主祭神との関係が隠された「えびす信仰」の秘密であって、この秘密を私はこれから解明していこうとしているという訳だ。恵比寿神社の公式ホームページには、恵比寿神社の主祭神として、八代言代主大神（やえことしろぬしおおかみ）、大国主大神（おおくにぬしおおかみ）、少彦名神（すくなひこなのかみ）の三柱が紹介されているが、これは「えびす信仰」が広く普及してからそうなったのであって、もともと栄西が建仁寺の鎮護社を建仁寺の建立にあたって祀った時に、その鎮守社を「えびす神社」と呼んだとは考えにくいし、その主祭神が上記の三柱であったというのはとても考えにくいことである。

では、建仁寺建立時の鎮守社はどのような神を祭ったのか？ 恵比寿神社の宮司が言うように、栄西禅師が宋へ渡るとき、嵐に遭ったのをえびす神に救われたことから、帰朝後お祀りしたということであるが、その頃にすでに「えびす信仰」が普及していたので、神社側で西宮神社の伝説などを参考にして「えびす神」としたのだろうけれど、「えびす神」

のプロトタイプ（原初）の神が存在する。西宮神社では「えびす神」のプロトタイプ（原初）の神に関する伝説が語られている。その神が栄西を救ったのである。その神こそ海人族の神である。

3、栄西最大の危機

栄西は、鎌倉初期の禅僧だが、日本の臨済宗の開祖である。比叡山で天台の教義を学び、二度入宋し、臨済禅を持ち帰る。京に建仁寺を創建して天台・真言・禅の三宗兼学の道場とし禅宗の拡大に努めた。また、茶を宋より移入し「喫茶養生記」を著した。また、[私の尊敬する明恵](#)は、禅を栄西について学んだ。いわば栄西は明恵の先生である。

<http://blog.goo.ne.jp/tenjin95/e/9dcf53979d0f26208a303d792fcaef4b>

室町時代にはすでに勘合貿易が始まり、栄西が宋に行った頃は、民間ベースでも盛んに日中貿易が行われた。したがって、渡海の危険性は遣隋使や遣唐使の頃に比べてはるかに少なくなっていたが、やはり海のことである。嵐が起れば、船が沈没することもたびたびあったのである。したがって、宮脇隆平の小説「栄西ものがたり」を読んでもそうになっているが、栄西は出航に当たっていくつかのゆかりの神社に安全祈願を行っている。栄西としては、相当の覚悟を持っての入宋であったのである。二度にわたって大変な苦勞をして、臨済禅を身につけて、大いなる夢と希望を持って日本に帰らんとするその航海で嵐に遭遇するのである。その場面は宮脇隆平の小説には出てこないが、ネットではいろいろな人がその場面を語っている。

<http://everkyoto.web.fc2.com/report229.html>

<http://kaiyu.omiki.com/ebisuA/ebisuA.html>

<http://www.kyoto-np.co.jp/info/sightseeing/mukasikatari/070130.html>

<https://m.facebook.com/tanbaebisu?v=info&expand=1>

<http://kyotokankou.com/hatumoude/hatumoude.html>

<http://higashiyama-kanko.jp/pickup/karuta.html>

皆さん方それぞれに、その場面を想像して欲しい。そして、栄西が一心に祈っている場面を想像して欲しい。私はこう考えている。あくまでも想像だが、常識的に考えて、当時の

船は宋の商人の船であったとは思いますが、船乗りの中にはある程度の日本人も居たと考える。彼らはいわゆる海人族で海の男たちである。日本の海人族の歴史は古く、縄文時代、否、旧石器時代まで遡（さかのぼ）る。倭寇（わこう）とは、鎌倉時代から室町時代にかけて朝鮮半島や中国大陸の沿岸部や一部内陸、及び東アジア諸地域において活動した海賊、私貿易、密貿易を行う貿易商人の事であるが、海人族の航海技術が如何に優れていたかが判る。栄西の乗った船が倭寇の船という訳ではないが、家人族の航海技術の高さを考えれば、栄西の乗った宋の船には海人族が混じっていたと考えるのはごく自然のことである。

そこで、私は思うのだが、嵐に遭遇した時には、海人族が自分たちの神に必死の祈りを捧げる、それは当然のしきたりであったであろう。栄西の乗った船が嵐に遭遇した時、彼らは必死で祈ったものと思う。そのお陰で船は沈没しなくて済んだ。栄西は無事日本に帰ることができた。海人族の神のお陰である。私は、栄西が祀った鎮護社の神というのは、海人族の神と考える次第である。

4、最古のえびす信仰

日本の三大「えびす神社」は、京都の恵比寿神社と大阪の今宮戎神社と大阪の西宮神社である。京都の恵比寿神社は栄西の建立を始まりとするので鎌倉時代の創建である。それでは大阪の今宮戎神社はいつの頃から「えびす神」を祀るようになったのであろうか。

大阪の今宮戎神社は聖徳太子の四天王寺建立の際に西方の守護神として建てられたと伝えられているので、神社そのものの創建時期は奈良時代と結構古いが、「えびす神」が祀られるようになったのは、比較的新しい。京都市の八坂神社の蛭子社（北向蛭子）から分祀したと伝わっているのである。八坂神社の氏子が今宮に移り住み、四天王寺の「市（いち）」の神（商売の神）として祀ったことに始まると言われている。平安時代のことである。

一方、大阪の西宮神社の方は、もっと古いようだ。七福神信仰事典（宮田登編、1998年11月、戎光祥出版）によると、西宮地方に伝わる「えびす伝説」というものを考えると、西宮の広田神社の撰社として存在した「夷社」は、明らかに海の社として信仰されていたのである。

そして、「民族と歴史」第三巻第一号（大正9年1月）に掲載の喜田貞吉（きたさだきち）の「夷三郎考」において、喜田貞吉は「夷神を蛭子だということは鎌倉時代にすでに存在した説ではあるが、もとより取るに足らない説である。」と言っている。喜田貞吉（きたさだきち）は、戦前の歴史学者であり、考古学、民俗学も取り入れ、京都大学で歴史研究を進めた。大正9年から大正13年まで京都大学の教授。大正12年に設置されたば

かりの東北大学国史学研究室の講師となり、古代史・考古学を担当。同研究室草創の基礎を築いた。私は、広田神社に祀られたという「夷神」は、記紀の影響を受けて変身していくのであり、そのプロトタイプがあると考えている。その原初の神は、西宮地方に伝わる「えびす伝説」を考察することによって、真実が判るものと思う。私も、喜田貞吉と同じように、夷蛭子説は後世に出来上がった俗説であると思う。では、西宮地方に伝わる「えびす伝説」を考察することにしよう。

5、西宮地方のえびす伝説について

西宮地方の公式ホームページに記載の「西宮地方のえびす伝説」から蛭子に関する記述を削除し、さらに「えびす神」を「神」「海の神」「海を支配する神」などと書き変えて紹介すると次のようになる。すなわち、

『昔々、鳴尾に住んでいた漁師が、沖で漁をしていたところ、網に大変手ごたえを感じました。喜んで引き上げてみますと、それは期待していた魚ではなく、今まで見たこともないものでした。よく見ると人形のような、又御神像の様にも見えましたが、魚ではないので海にもどしてしまい、また魚の群れを求め、西の方へと船を進めてゆきました。なかなかえものに恵まれず、今の神戸の和田岬の辺りまで来て、なかばあきらめながら網を入れたところ、再び大変な手応えを感じ、今度こそはと勇んで網を引き上げてみると、何とそれは先程海にもどしたはずの、あの御神像の様に見えたものでありました。

漁師は瞬時に、これは徒事ではないと確信し、漁をきりあげ、御神像を丁寧に布にくるみ、家に持ち帰りました。粗末な家ではありましたが、漁師はその像の為に床をしつらえ、朝な夕なにお供え物をし、お祀りすることになりました。

しばらくたったある日、いつもの様に夕方のお供えをして、自分も夕食をとり、やがて眠りにつきました。その夜の夢の中に、お祀りしている御神像が現れ、日頃丁寧に祀ってもらって有り難いが、ここより西の方に良き宮地がある。そこに遷し宮居を建て改めて祀ってもらいたい。」との御神託があったのです。

この神が海の神として茅渟の海、今の大阪湾岸を支配する神として、海に生業の道を求める人々に絶大なる信仰を集めてゆくのです。

さて鳴尾の漁師は恐れ謹み、漁師仲間と相談し、その神を輿にお乗せし、御神託の通り西の方、良き宮地を求めて出立しました。途中いく度か輿を下ろし休憩して行きましたが、

ある所で一休みされたその神が、よほどお疲れになったか眠り込んでしまわれ、なかなかお目覚めになりません。困った漁師たちは、恐れ多いとは思いましたが、神のお尻を捻ってお目を覚ましていただき、再び西へ向って進まれたという話も残っています。その御輿（みこし）を置いて一休みされたといわれているところが、西宮神社より東へ二百米程の札場筋角にある御輿屋跡地(おこしやあとち)といわれているところなのです。このようにして海より甦った神は、海を支配するとしてこの西宮の地にお鎮まりになったのです。』・・・と。

また、七福神信仰事典（宮田登編、1998年11月、戎光祥出版）によると、先にも述べたように、この神は明らかに海の神である。しかも、断定はしていないが、その海の神が外来神であることを示唆している。ところで、海の仕事といえば、漁師も居るが、海でいちばん危険なのは、船乗りである。海人族である。そこで、次に、そのことの考察をする。

6、古代の外来神について

古代に日本に伝来してきた神で今もなお神社やお寺に祀られている神はどんな神がいるだろうか？

九州各地で祀られている「にゃんにゃん」、全国各地で祀られている「弁天さん」と「えびすさん」。

その他に、地域は限定されているけれど、丹後の籠神社の「ホアカリ」である。熱海の伊豆山神社の神もそうとう古いが、外来神か在来神かよくわからない。比叡山延暦寺の四面大黒は、最澄が持ち込んだものであるのもので、それほど古いものではない。

「にゃんにゃん」と「ホアカリ」と「弁天さん」と「えびすさん」は、海洋民族、海人が日本に辿り着いてから祀り始めた自分たち海洋民族の神であり、それら海洋民族がどこに辿り着いたのか、それが問題である。「にゃんにゃん」は南さつま市であり、「ホアカリ」と「弁天さん」は丹後半島であり、「えびすさん」は西宮市である。

この問題を考える場合に大事なものは、古代において、舟運、すなわち海上の道というものがどうであったのか、その歴史認識である。太平洋における海上の道は、旧石器時代から存在するが、西宮に辿り着いた海人がこの道を通って来たとは考えにくい。何故なら、西宮に辿り着いた海人が奉じた神は、漁業に繋がる神でもあり、太平洋側に類似の神が見当たらないからである。旧石器時代はいざ知らず、少なくとも縄文時代に日本海の海上の道が存在したことは間違いない。日本海の海上の道は、少なくとも青森県から朝鮮半島の間には存在した。その間の何処から西宮にやって来たか判らないが、類似の神が丹後半島にはおわす。それが「ホアカリ」である。

それでは、ホアカリについて説明したい。

伴とし子という人がいる。丹後の人で、学者ではないが、永年、「海部系図（あまべけいず）」の研究をした人で、「前ヤマトを創った大丹波王国・・・国宝・海部系図が解く真実の古代史」という本（平成16年1月、新人物往来社）がある。それにもとづいて「丹後王国論」を展開している人である。その伴とし子が

ホアカリノミコトは、丹波国（今の丹後）の凡海息津嶋に降臨した。これは、今、冠島と呼ばれている。そして、養老3年に籠神社に天降った。

と言っている。ホアカリは現在籠神社に祀られているが、このホアカリと西宮との関連については、私の「えびすホアカリ考」の核心であり、以下において逐次説明する。

7、物部氏について

私は、「邪馬台国と古代史の最新」という論文の第6章で物部氏のことを書いた。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yamatai06.pdf>

その中から、ここでの関連事項をピックアップしておきたい。

邪馬台国の時代から大和朝廷の時代を通して、いろいろとちらつくのが物部氏である。

物部氏については、雄略天皇の時代に水軍と関係のある伊勢の豪族を征討したこと、また継体天皇の時代に水軍500を率いて百済に向かったことなどが伝承されており、物部氏が水軍をその傘下におさめていたことは容易に想像がつくが、学習院大学の黛（まゆずみ）弘通教授がその点を別途詳しく述べておられる（「古代日本の豪族」、エコールド・ロイヤル古代日本を考える第9巻、学生者）。以下に、その要点を紹介しておきたい。黛（まゆずみ）弘通教授の考えは次の通りである。すなわち、

『「旧事本紀」の中の「天神本紀」には、ニギハヤヒが降臨するときにつき従った神々とか、そのたもろもろの従者のことが詳しく出ているが、それによると、つきしたがった神に海部族（あまぞく）である尾張の豪族がいるし、つき従った従者に、船長と舵取りと舟子がそっている。物部氏が航海民、海人族と関係があったのは間違いがないのではないか。物部氏系統の国造を詳しく調べると、物部氏は瀬戸内海を制覇していたことが推定される。太田亮氏は物部氏発祥の地を筑後川流域とされているが、大分県の竹田市付近が発祥の地ということも考えられる。「日本書紀」に豊後の直入郡の直入物部神（なおりのもののかみ）というのと直入中臣神（なおりなかとみのかみ）というのが出てくる。』・・・と。

私は、何度も大野川に出かけて行って、古代から大野川は水運で瀬戸内海と密接に繋がっていることを認識した上で、物部氏の本貫地は大野川の上流域ではないかと直観していた。したがって、自分の直観を信じ、黛（まゆずみ）弘通教授の見解にしたがいたいと思

う。

物部氏は、間違いなく瀬戸内海の支配者であったと思う。船乗りを専門とする海人族を束ねていたのである。しかも、物部氏の先祖については上述のように、「旧事本紀」の中の「天神本紀」には、ニギハヤヒが降臨するときにつき従った神々とか、そのたもろもろの従者のことが詳しく出ているが、それによると、つきしたがった神に海部族（あまぞく）である尾張の豪族がいるし、つき従った従者に、船長と舵取りと舟子がそっている。物部氏が航海民、海人族と関係があったのは間違いがないのではないか。

したがって、物部氏に従う船長とか舵取りとか船子にとって、物部氏の先祖こそ海の神であった筈である。私は、瀬戸内海を行き来する海人族の神とは、物部氏が祀った先祖神（ニギハヤヒ）であると考えている。

ところで、先の紹介した

私は、先程も述べたけれど、伴とし子の「前ヤマトを創った大丹波王国・・・国宝・海部系図が解く真実の古代史」という本に、明確に物部氏の祖神は「ニギハヤヒ」であり、それがホアカリだというのである。紙枚の関係もありその論拠をここに紹介することはできないが、是非、彼女の本を読んでもらいたい。

8、ホアカリ

伴とし子の「前ヤマトを創った大丹波王国・・・国宝・海部系図が解く真実の古代史」の中から、次にホアカリに関する記述を紹介しておこう。ただし、「海部氏系図」に記載の海部氏の始祖「彦火明命（ホアカリノミコト）」はホアカリのことであるので、読みやすいように単に「ホアカリ」と書き換える。彼女は次のように述べている。すなわち、

『ホアカリは、丹波国（今の丹後）の凡海息津嶋に降臨した。これは、今、冠島と呼ばれている。そして、養老3年3月22日、籠宮に天降る。』

『天孫降臨した人物は、ニニギノミコトとホアカリである。そして、ニニギノミコトは、九州に降臨したのである。そして、ホアカリノミコトは、丹後に降臨したのである。』

冠島は、若狭湾の沖合にある。次のホームページに判りよい地図が載っているので、まずその位置をご確認ください。その上で、この丹後地方というのが古来海上交通の拠点であったことを想像してください。実は、弁財天は外来の神であり、どうもこの若狭湾にやってきたらしいので、そのことを説明したい。

日本の三大弁財天は、やはり江ノ島と巖島と竹生島の弁財天というのが正当であろう。この中で竹生島の弁財天がいちばん古い。

弁財天というのは、もともとインドはシバ教の神である。それがどのような経路で竹生島までやってきたのか？ 糸魚川の翡翠が朝鮮半島から出土することから、日本海と朝鮮半島の間には翡翠の道があったことは間違いない。シバ教の女神「サラスヴァティー」が天竺から中国に、そして、翡翠の道を通って丹後の冠島（かんむりじま）に降臨した。そして、それが海人族の神となったのである。現在の弁財天は、宗像の神「市杵島姫命（いちきしまひめ）」と習合して誕生したものであるが、実は、それ以前に、竹生島で弁財天が祀られるようになっていた。したがって、他の弁財天と区別して、竹生島では大弁財天という。しかし、日本の中に弁財天さんの故郷を探すとすれば、それは丹後の冠島である。丹後王朝と近江王朝との往来は盛んであったので、丹後の海人族に連れられて弁財天さんは竹生島にやって来たのである。

丹後一宮であり、伊勢神宮の元の神社・元伊勢神社でもある籠神社（このじんじゃ）には数多くの伝承が伝わっている。その多くが謎に満ちているのだが、その一つに弁財天さんに関する伝承がある。

籠神社（このじんじゃ）の東方海上20km余に「ホアカリ」がお後の市杵島姫命（いちきしまひめのみこと）と最初に天降ったと伝えられる冠島がある。市杵島姫命：その後宗像大社などに祀られるが、もともとの市杵島姫命は冠島の伝承が古い。すなわち、弁財天さんの信仰はインドからどういう経路か判らないが、丹後半島に伝わったようだ。冠島の伝承については、次のホームページが詳しいので、ここに紹介しておきたい。

http://www.geocities.jp/k_saito_site/doc/tango/oitsimaj.html

以上、私はえびす神のプロトタイプ、すなわち原初的な神が物部の祖先神であり、それがとりもなおさずホアカリであることを述べてきた。もちろん、それが必ずしも論理的なせつめいになっていないことは百も承知である。しかし、そういう考えもあり得るということは確かであろう。あとは、学者のこれからの研究に待つ所が大であるが、私としては、「えびす神の原初はホアカリである」と言い切っておきたい。このあと、その「ホアカリ」がどのように「えびす神」に変身していったかを説明することとする。

9、西宮神社の夷三郎社

「西宮地方のえびす伝説」にあるように、えびす神の原初的な神が西宮地方のもっとも立派な神社の片隅に摂社として祀られた。広田神社は日本神話に当社の創建のことが書かれている。それほど古くまた格式の高い神社である。神功皇后の三韓征伐に出発する際、天照大神の神託があり、和魂が天皇の身を守り、荒魂が先鋒として船を導くだろうと言った。皇后の留守の間に忍熊王が神功皇后とお腹の中にいる皇子（後の応神天皇）を亡きものにしようと明石で待ち伏せていた。戦いを終え、帰途それを知った神功皇后は、紀淡海峡に迂回して難波の港を目指した。しかし、難波の港が目の前という所で、船が海中でぐるぐる回って進めなくなってしまった。そこで兵庫の港に向かい、神意をうかがうと、天照大神の託宣があった。「荒魂を皇居の近くに置くのは良くない。広田国に置くのが良い」と。そこで皇后は、山背根子の娘の葉山媛に天照大神の荒魂を祀られた。これが廣田神社の創建である。

このとき、生田神社・長田神社・住吉大社に祀られることになる神からも託宣があり、それぞれの神社の鎮座が行われた。すると、船は軽やかに動き出し、忍熊王を退治することができた。

朝廷より篤い崇敬を受け、『延喜式神名帳』では名神大社に列し、二十二社の一社とされ、たびたび奉幣勅使の派遣があった。平安時代後期より、神祇伯白川家との関係が深く、代替わりのごとに当社に参詣していた。

七福神信仰事典（宮田登編、1998年11月、戎光祥出版）によると、白川伯家は、平安中期に花山天皇の皇子清仁親王の子・延信王（のぶざねおう）が、1025年に源性を賜って臣下に列せられ、神祇伯（神祇官の長官）となって以来、その後裔（こうえい）が世襲して白川伯と称するようになった名家である。伯家は、その経済的基盤を支えるいくつかの社領を持っていたが、なかでも西宮一帯に広大な社領地を所有して特別な関心を持って管理していた。とりわけ、その領地内にある広田神社にその摂社である南宮と夷社を含めて、「西宮」と称して格別の厚い崇敬の誠を捧げていた。

ところが、その夷社には、平安時代の末期頃から「傀儡子（くぐつし）」と称して神社に所属し、日常は神社の雑用を努めるかたわら、人形を操ることを特技とする一団の人たちがいた。彼らは、故もって夷社の主神や縁起を人形操りの技芸の主題に取り上げ、大衆娯楽の一端として各地に分散して多くの民衆にその神徳の宣伝に努めるようになったのである。それを世間では「夷かき」とか、あるいは「夷まわし」と呼ぶようになり、えびす信仰が広く普及していったのである。

10、夷三郎左衛門尉

「民族と歴史」第三巻第一号（大正9年1月）に掲載の「夷三郎考」において、喜田貞吉は、次のように述べている。すなわち、

『 余が幼時郷里阿波南方の田舎へ、夷舞（えびすま）はしの物もらいが度々廻ってきて、携帯の箱から恵美須の木偶（でこ）を取り出し、「西の宮の恵美須三郎左衛門尉（えびすさぶろうさえものじょう）、生まれ月日は何時ぞと問えば、福德元年三日、寅の一点まだ卯の刻に、なるやならず安（や）ツす安（や）ツすとご誕生なあされた」などと、めでたい事の数々を並べて木偶（でこ）に滑稽なる所作を演ぜしめ、子供らを喜ばせて米銭を貰ったものであった。（中略）けだし西の宮の産所などと同じ仲間で、祝言をもって世に渡る傀儡子の垂流である。これら傀儡子の、以て夷三郎と呼ぶところのものは、烏帽子狩衣を着した、破顔微笑の一体の木偶坊（でくのぼう）で、大黒と並べて祭られた夷神の神像を模したものである。』・・・と。

すなわち、この「夷かき」によって、広田神社の主神は、「夷三郎左衛門尉（えびすさぶろうさえものじょう）」と世間では言うようになったのである。

今私が稽古中の小唄に「そもそも我らは西宮、夷三郎左衛門尉」というのがある。七福神を並び立てて、最後に「笑う門（かど）には福来る」という文句で軽くおとす、江戸小唄として実に朗らかな節付きの小唄である。江戸時代には酒宴でおおいにもてはやされたらしい。

夷三郎左衛門尉の普及に伴って、何時とはなしに広田神社の摂社・夷社は「夷三郎殿」と呼ばれるようになる。

何故、三郎か？ これはよく判らないが、私の想像では、格式から言って、当然、一が広田神社の主神（天照大神）、二が南宮の主神（武御名方大神）である。このような神を傀儡子といえどもおもしろおかしく茶化すことははばかれる。そこで、三番目の神、「えびす神」を広田神社の代表に挙げたのであろう。夷三郎左衛門尉は「えびす神」のあだ名である。えびす信仰の普及のお陰で、三郎殿は「福の神」「商売の神」の戎神社として大きくなっていった、世間的には広田神社を凌ぐようになっていく。

西宮神社の公式ホームページは次の通りである。

<http://nishinomiya-ebisu.com/index.html>

これを見ていただければ判るが、広田神社と西宮戎神社との関係はいろいろとややこしい経緯があるようだが、戦後は、広田神社と西宮神社はそれぞれ別の宗教法人になっている。